

読売テレビ放送主催「鳥人間コンテスト選手権大会」への挑戦記録

若人の挑戦、風になれ、鳥になれ

N. K

まえがき

今から20年前に高知で体験した感動の回顧録である。2004年8月、読売テレビ放送主催の「鳥人間コンテスト選手権大会」が琵琶湖で開催され、高知職業能力開発短期大学校（ポリテクカレッジ高知）の学生チームが参加した。高知県をはじめ地域産業界や研究・教育機関などから全面的に支援を受け、翼長20メートルの機体「龍馬号」が完成した。飛行当日は台風の余波で大風に悩まされながら龍馬号は琵琶湖に向けて飛び出した。

現在も卒業生と交流が続いており、彼らは社会人となった今もこの取り組みで得られた体験を忘れることはできないと語っている。学生たちのチャレンジ精神、教職員のサポート、地域との産学連携など、人材育成にも寄与したとの思いから記憶を整理したものである。

龍馬号の誕生

ポリテクカレッジ高知チームは滑空機（グライダー）部門に出場することになった。機体の名前は「龍馬号」。高知らしい名前がつけられている。全国の大学など68チームの参加応募があった。その中から書類選考で選ばれたのは20チームだけだった。初めての応募で出場が認められるのは珍しいことだ。地場産品の土佐和紙を機体を使用して、他のチームとは異なる特徴を持たせたことが選ばれた理由である。機体は軽ければ軽いほど良いので、他のチームは機体にポリプロピレンを使っている。土佐和紙は重さ、耐水性、加工性など、どれをとっても不利であったが、そこを承知で土佐和紙にこだわった作戦は大成功だった。

地域連携

他の参加チームは既に機体の組み立て作業を完了していた。どのチームも機体製作に工夫の跡が見受けられる。龍馬号の周りにもカメラ片手に他チームからの見学者が訪れて来た。特にカーボンシャフトの接合部分に関心があるようで、シャッターが何度となく押されていた。翼のリブは発泡スチロールで作ったが、その切断面が完璧だったので切断方法の質問も多かった。これは高知東工業高校の新型レーザー切断機を借用したお陰である。カーボンシャフトは企業の電熱炉を借用したり、土佐和紙の強度試験は県立紙産業技術センターの協力を得たり、地域連携の成果だ。

楽しいバーベキュー

前夜祭の楽しいバーベキューが始まった。学校の冷蔵庫にタレを忘れてくるハプニングはあったが、肉も野菜も美味しかった。飲みもの片手に学生と職員がいくつもの輪になって談笑している。普段の学校生活では見られない気持ちの良い光景だ。そんな中、パイロットの川村君は食事をとることもなく、じっとBBQの火を眺めているだけだ。減量の挑戦はまだ続いているのだ。明日の飛行のことも考えているのだろう。なかなかの根性だ。

ポリテクカレッジ京都から藤根さんと学生たちも飛び入りで加わった。来年の大会にはカレッジ京都も是非出場したいそうで、カレッジ高知の様子を見に来たそうだ。藤井部長と設計者の政木君を中心に輪ができた。機体設計の苦労話やクラブ運営の難しさなど、BBQが終わるまで話が尽きることは無かった。助言できるノウハウを学生たちが身に付けたのは頼

もしいことだ。ポリテク関西からは中脇さんとカレッジ高知OBの山口さんも応援に来てくれた。山口さんは試験飛行のときにも顔を出してくれ、機体を必死に支えてくれたことを思い出す。ポリテク中部からは古城さんと三木さんも駆けつけてくれた。このように人と人の輪が広がることは嬉しいことだ。長旅とテント設営の重労働で疲れが出たのか、あちこちに寝転ぶ姿が目立ってきた。明日へ向けての体力温存も考えておかなければならない。飲み物や食料などを残したままBBQの火は落とされた。機体は木枠に収納したままテントに収めてあったが、風雨がますます強くなってきたので、万が一を考えてトラックの荷台に戻しておくことにした。果たして明日は飛べるのだろうか。

眠れぬ一夜

一晩中、テントが強風にあおわれてバタバタと音を出し、テント全体が移動することもあった。ときどき雨も強くなり屋根のすき間から寝顔に雨粒が落ちてきた。野嶋さんはテントの固定状態が気になるのか一晩中ロープの緩みを点検していた。きっと寝る暇は無かった筈だ。このような状況の中でも学生や若手の職員は熟睡している。どんな環境下でも熟睡できるのは若者の特権なのだ。それでも彼らは目が覚めると、全然眠れなかった、とぼやいていた。テントの中が暑いので外のコンクリートの上に寝た学生もいた。強風で蚊も飛ばされたのだろう、蚊で悩むことはなかったようである。

全員が眠い目をこすりながら起きてきた。朝食は近くのコンビニで買ってきたおにぎりや昨夜のBBQの残り物。みんな食欲は無いようである。

必死の機体組み立て

大会関係者から機体チェックの通告が突然あった。風雨を避けて機体はまだトラックの荷台に納めたままだ。機体チェックで合格をもらわなければ、理由はともかく失格である。折角ここまでたどり着いたのに機体未完成で失格にされたのではかなわない。佐藤先生の指示のもと、クモの子を散らすように全員が動き出した。テント内を整理して機体置き場を確保する者、雨から機体を守るために屋根のシートを補修する者、トラックに飛び乗ってホロを外す者、全員必死である。目的に向かって一致団結、全員の動きに無駄が無いのは見ても気持ちが良い。他のチームは既に機体チェックが終わったようだが龍馬号にはなかなか機体審査員が来てくれない。一体どうなっているのだろうか。みんなの気持ちが動揺し始めてきた。

テスト飛行

正午になった。予定どおりに競技を開始する、と大会本部から案内放送があった。飛行に先立ち、ハンググライダーによるテスト飛行があった。風は岸から湖に向けての強い追い風だ。飛行には向かないが飛べるのだろうか、みんなが見守る中ハンググライダーは、湖面から10メートルの高さに設けられたプラトホームから飛び出した。危ない！ 案の定失速して墜落してしまった。二機目も飛ぶ準備をしていたが危険のため飛行を中止してしまった。テスト飛行したのは読売テレビのベテランパイロットらしい。彼が飛べないのに、素人が作った紙の飛行機が飛ぶのだろうか、不安はますます大きくなってきた。

機体審査

やっと機体審査員が来てくれた。パイロットの安全性について特に厳しいチェックを受けるのだ。自信はあった。しかしチェックが始まってすぐ、コックピットの安全性を指摘された。最悪の場合、パイロットは機体と共に10メートルの高さから水面に落ちるので、その

衝撃は想像以上に大きいそうである。指摘部分を保護クッションなどでカバーして、やっとの思いで機体チェックをパスすることができた。この時点で始めて飛行が認められたわけで、一安心した。雨から機体を守るビニールは、まだ覆ったままである。

ポリテク応援団

応援隊は応援団席へ移動することになった。機体を維持するサポート隊を残して、飛ばすぞ！ の掛け声でお互いの健闘を誓い合い、高知県のマスコット、ぬいぐるみの「くろしお君」を先頭にテントを離れた。くろしお君は人気者、子供は当然のことながら大人にも人気があり、写真の被写体の連続だった。それにしてもこの暑さだ。ぬいぐるみの中で、大汗を流しながら愛嬌をふりまく、秦泉寺君の奮闘はすごいものだ。彼のがんばりは高知観光の宣伝にも寄与しているわけだ。

応援席はプラットホームの右手側の岸壁にやぐらで組んであった。オーロラビジョンがセットされ、飛行状況や応援の様子が画面で映し出されている。パイロットの緊張した表情、無事の飛行を祈る応援団員の表情など、手に取るように見ることができる。読売テレビのカメラマンも準備が整い、応援リハーサルを開始した。坂本さんが応援団長だ。畠山さん、北川さん、池内さん、岡林さん、市川さん、宮脇さん、それぞれのTシャツにくろしお君の愛らしい顔がプリントしてある。団長の掛け声に合わせて、一人ひとり順番に半回転して背中を見せた。背中には、「と」「ぶ」「ぜ」「よ」「龍」「馬」と大きな文字で書かれている。なかなかの趣向だ。全員で、飛ぶぜよ龍馬、飛ぶぜよ龍馬、と声を合わせてパフォーマンスするが、恥ずかしい気持ちなのだろう、何となくパツとしない。しかし、さすがはポリテク応援団、本番はビシッと決めた。修了生で書道家の高橋さんが「風””に””な””れ」と土佐和紙のバナーに太筆で書いた。TVカメラがその力強い筆の動きを追い、その様子がオーロラビジョンの大画面に映し出された。この模様は全国放送でも流されることだろう。

やっとの出番

翼の長さ20メートル、重さ34キロの機体はサポート隊に支えられながらゆっくりと大会本部前へ移動して来た。ちょっとした風でも機体が浮き上がってしまうので大丈夫だろうか、途中で機体が破損してしまわないだろうか、心配し出したらきりが無い。ここは運を天に任せる他はないのだ。機体を支えている仲間はどうな気持ちでがんばっているのだろうか、などと考えているうちに機体は無事にプラットホーム下まで移動してきた。

龍馬号の出番は13番目。すでに10機が飛び出している。ほとんどの機体は追い風に押されて、浮き上がることなく落下している。そんな中でもタイミング良く風が止まった瞬間に飛び出したチームは飛行に成功している。100メートル近く飛びながらも、機体を支えていた補助員がプラットホームから落下してしまい、規定により残念ながら失格したチームもあった。実際の滑空を目の前で見るのは始めてだったが、成功チームの飛行はすばらしいものだった。設計者がいつも言っていた「水面効果」を実感できる飛び方だった。目をつぶると二つの光景が写っている。一つはプラットホームから飛び出した龍馬号が水面近くをどこまでも、どこまでも飛んでいく姿。二つ目は水平飛行に移る前に落下してしまう龍馬号。どうか前者であって欲しい。

プラットホーム上の戦い

ついに龍馬号はプラットホームに移動した。遠くには彦根城の雄姿が見えている。オーロラビジョンには必死になって機体を支えている姿、カバーしていたビニールを夢中で外す姿

が大写しになっている。突然、パイロットの川村君の姿が映し出された。なんと機体を必死に支えているのではないか。どうしたのだろうか。パイロットが機体を支えているということは、風が強すぎて飛行を断念したのだろうか。応援団としては複雑な思いでプラットホームの龍馬号をただただ眺めるのみであった。ほどなくして龍馬号は機首を湖の方向へ向けて正規の位置に停止した。いよいよ飛行だ。審判長の手には赤旗が高々と上げられている。白旗になったらゴーサインだ。10秒、20秒、30秒過ぎても赤旗のままである。風よ止まれ、風よ止め、オーロラビジョンに表示される風速計と龍馬号を、交互に眺める。時間が長く感じられる。風向きはずっと追い風、風速は秒速8から4メートル。なかなか風は弱まってくれない。

飛んでくれ！

審判の旗が白になった。風速は6メートルもある。きっと待ちきれなくなったのであろう。龍馬号は飛ぶのだろうか、龍馬号が動き始めた。あー、飛んでくれ、飛んでくれ。ポリテクチームの期待を背に受け、我らが龍馬号が動き出した。プラットホームの端まで移動してきた。見た感じ、まだ機体は浮力を得ていないようだ。機首が飛び出した。機体も飛び出した。尻をつかずに飛んでくれ！ みんなの願いは同じであろう。テスト飛行のときには機体が風を受けて翼が大きくしなり、機首が上向きになったのではないか、、、、。

機体は風を受けて浮き上がることも無く左翼を少し下に傾けながら、落ちるように飛び出していった。姿勢が立ち直ることを期待していたが、そのまま機首を湖面に向けて落ちて行った。

若人の挑戦は終わった

ほんの一瞬の出来事だったのだろうが、長く感じた。応援団席を振り返ると、そこには目から大粒の涙を流す学生たちの姿があった。無事に飛んだ嬉し涙なのだろうか、浮くことなく落ちてしまった機体への悲し涙なのだろうか、それぞれの胸の内は分からない。言えることは、これですべてが終わってしまった、ということだけである。小野さん一家も、東京から駆けつけてくれた山崎さんも、川村君のご家族など高知からの応援者も思いは同じであろう。

サポート隊は一斉にプラットホームの端に走り寄り、白波の立つ湖面を注視している。パイロットの川村君を心配しているのだろう。一瞬の間をおいて、真っ赤なヘルメットがポカリと水面に頭を出した。つづいて川村君の顔も見えた。元気に手を振っている。取り敢えず、怪我は無かったようだ。レスキューボートに引き上げられた川村君は、応援団の待つ岸壁へ戻ってきた。顔はくしゃくしゃだ。思うように飛べなかった悔しさだろう。やるだけはやったのだ。ごくろうさん。くろしお君もやさしく肩に手をかけて迎えている。オーロラビジョンに龍馬号の公式記録17m13cmが表示されていた。もう誰ひとりとして表示に気づく気力は残っていなかった。

むなしさと愛嬌

機体は無残な姿になってボートに引かれて戻ってきた。着水するまでは機体はすばらしい姿を保っていたので、着水時の衝撃とボートに引かれたことで壊れたのだろう。亡き骸を集めるように部品の一つひとつを集めて回った。心境は複雑だった。意外にも主翼のカーボンパイプが完全に折れている。断面は乾燥した竹が割れたようになっている。着水時の衝撃の大きさを証明する姿であろう。来年の参加に向けての工学的な解析が必要だ。機体回収にト

ラックが到着した。黙々と残骸を積み込む学生たちの後ろ姿に、むなしさが漂っていた。そんな光景の中、ひとり元気な姿があった。それはマスコットのくろしお君だ。子供たちを相手に最後の最後まで、サービス精神を忘れることなく愛嬌を振りまいていた。

ポリテクカレッジ高知鳥人間クラブ、バンザイ！！

(注：登場人物は仮名です。優勝チームの飛行距離は 63m、龍馬号は 17m で出場 20 チーム中 12 位でした。)